

「相中相高百年史」より
 (戦時体制下の相馬中学校 10)

10 学徒動員：三年生 (相中第 45・46 期生等)・・・ペンをハンマーに
 《 横浜・海軍航空技術廠支廠へ出動 》

(1) 海軍航空技術^{しょう}廠支廠へ勇躍出発す

1942 (昭和 17) 年 4 月、あこがれの「名門相馬中学」に入学することができた。我々は、夢と希望に胸を膨らませ毎日北から南から、遠路のものともせず喜び勇んで通学したのだが、だんだん日が経つにつれ戦況は悪化してきた。戦雲急を告げる状況下にあつては、我々相中生だけが落ち着いて勉学に勤しむことは許されなかった。しかも、英語は敵国語だからという理由で、授業時数が極端に減らされた。だれが言い出したかは知らないが、不思議な気がした。「これでいいのか」と……。さらに、「教練」という科目があり、これに関わる配属将校・下士官等が必要以上に威張り出した。

我々が相馬中学に期待していた所期の目的とはうらはらに、出征兵士の留守宅の田植え作業・田圃の暗渠排水溝作り・原町飛行場 (現在の野馬追祭場地及びその西方に存在した) の掩体壕 (えんたいごう) 作業等に明け暮れる日々が待っていた。かくて我々は、次々と作業現場に送り込まれたのである。

飛行場での作業は、土を一杯に盛ったモッコかつぎであった。天秤棒が肩にグイッと食い込んで真っ赤に腫れ上がり、痛くて苦しいことはこの上もなかった。このことは、五十数年たった今でも、つい昨日のこのように思い出される。辛くてもやるしかなかった。

勉強するために入学したのに、本当に勉強できたのは、どれほどの時間であろうか。在学五年間の半分にも満たなかったような気がする。これから紹介する「勤労働員」も、丁度 10 ヶ月間横浜の軍需工場で働いたわけで、工場から帰ってくるとくたくただった。だから、その間もそれこそ勉強どころではなかった。

中学三年になった 10 月のある日、とうとう我々は次のような出動命令書を学校長からもらうことになった。ただ、「お国のため」そして「神風が吹くから……」と教えこまれ、疑うことは全くなかった。いや、そうかたく信じこまされていたのである。

この令状をもらった我々三年生は、四年生と一緒になんの疑念を持つこともなく、当然のように、1944 (昭和 19) 年 10 月 17 日、夕闇迫る中村駅 (現相馬駅) 前に集合した。

大勢の父兄や親族達が見送るなか、全員整列し、文字どおり若き血を燃やししながら、校歌や軍歌を声高らかに歌い、意気盛んであることを示したのであった。

馬陵の城の名に負える 春の若駒勇ましく
 克己の鞭は風を切り 進取のあがき雲をよぶ 同窓五百の健男児
 ……………

いつ聞いても歌っても、背筋がピンとなり身の引き締まる思いがする。



つづいて軍歌の大合唱だ。

「あゝ紅の血は燃える」

花も蕾の若桜 五尺の命ひっさげて

国の大事に殉ずるは 我等学徒の面目ぞ あゝ紅の血は燃ゆる

.....

そして学校長の送別のことばがあり、学徒代表が元気よく出発の挨拶をして、午後6時55分、臨時の夜行列車に乗り込み、車中の人となった。

そのときの我々相馬中学三年生181名（病気等のため少し遅れて出動した者もいる）は、まだ十四、五歳の少年だったのである。

同じ列車で、四年生第一班は芝浦製作所川崎工場へ、第二班は東京芝浦電気大宮工場へ出動した。

三年生が一番遠く離れた横浜市磯子区にあった「海軍航空技術廠支廠」へ出動することになった。引率は阿部（忠）、太田、栃本、加藤各先生方である。

「学徒らの談笑乗せし動員列車

待てる運命（さだめ）は知る由もなし 大野博伸^(※1)

その日は臨時列車の中で睡眠をとり、金沢八景駅において宿舎である「白山道」に着いたのは翌日の夕方であった。貴重な労働力として、最初はそれなりの待遇であったと記憶している。

横浜について数日経ってから、三年生は射撃部と製鋼部の二つに分けられ配属されることとなった。そしてこれが運命の分かれ目になろうとは、神ならぬ身の知る由もなかった。後述するように二名の学友の貴い命が奪われてしまい、まだ童顔の美少年に永久（とわ）の分れを告げなければならなかったのである。なんという運命のいたずらであろうか。彼等の死を知った時はただただ悲嘆にくれるのみであった。

工場にはすでに、新潟県立新潟中学校 山梨県立巨摩高等女学校 静岡県立松崎高等女学校

静岡県立下田高等女学校 静岡県立三島商業学校 山形県立長井高等女学校

秋田県立大曲高等女学校 秋田県立角館高等女学校 千葉県立成田中学校

千葉県立銚子中学校 山梨県立都留中学校 山梨県立谷村工商学校

の生徒や、藤原工大（現東京工大）、日大予科、山梨師範、山形師範等の学生が、すでに動員されて働いていた。この中からも空爆による多くの犠牲者が出ている。

(※1) 中第46回 昭和22年卒 中村出身